神獣の皇国 ～ 龍笛の空姫と大剣の騎士～

涼風 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神獣の皇国 ～龍笛の空姫と大剣の騎士～

【Nコード】

N1484Q

【作者名】

涼風 玲

【あらすじ】

神獣に守られた皇国。幾つもの王国を内に持ち、それぞれの王家の更の上に皇家が立つ、という変わった体制を取っているこの国の中、「龍笛ノ国」の王女として生まれた少女、フィアーテ。

父親こそ国王であるものの、母親が異端だった為に迫害されて育った彼女は、ある日とうとう国を追われてしまう。そんな彼女が森の中で出会った二人の少年。そこから、皇国の危機を救った伝説の姫騎士の物語が始まる・・・

序章

序章

大陸の半分を占める大国、ダルタ皇国。他の国とは違い、幾つかの国が寄り集まった中、一人の光皇が皇国の主として君臨するといふ珍しい体制を取るこの国には、ある高貴なる獣がいた。

マリートネ
シヤトネ
ジャード
ホルス
アケヨルデ
紅王鳳、蒼皇龍、白帝虎、玄公亀、そして天光馬。

この五柱は神獣とも呼ばれ、皇国の平和を護る、皇国の護国神とされていた。そして、これらの神獣の背に乗り武器を携え、他国の侵入から国を守る軍隊を神獣軍と言ひ、この大陸で圧倒的な強さを誇るその有様から、皇国の獣鬼じゅうおにとさえ呼ばれていた。

そんな皇国の中にある王国の一つ、龍笛の王国の王都・紫龍しりゅう。

皇国で一、二を争う優美さと豪華さを誇る王城の回廊を、一人の少年が通り過ぎる大勢の人間に跪かれながら歩いて行った。

緩やかな風に吹かれ、少年の濃い茶色の髪が柔らかく揺れた。額に輝くのは細かい彫り細工が施された細い銀冠、この国の王太子である証拠である。そしてその瞳は、王都の名の由来になったともされる、王族の証である、深い紫色。

ほんの少し黄味の含まれた白い肌も、龍笛の国民の証である。そしてその容貌は、王族の威厳を感じさせながらも、優美さを失わない、まさに王城の様な美しさを誇っていた。

名を、アルド・イスカシヤ・アサン。

今上の王も名君として有名だが、この王太子が国王となった暁には、この国は最盛期を迎えるだろうと、彼に会った貴族や学者達は口を揃えて言う。それ程までに優秀なこの王太子は、しかし内心、自分の地位や貴族達を嫌っていた。そして、特に母后を。

彼の父である国王には、後の他に妃が四人もいた。けれども母后は、その妃の中で最も身分が低く、何の後ろ盾も無い妃とその娘を毛嫌いして、とうとう先日王城から離宮へ追いやってしまったのだ。

しかも、その妃と娘はアルドにとって、実の母と妹の様に大切な存在だった。更には、その母の所業に貴族達は何の反感も抱かなかった。それどころか、身分が低いとはいえ王が選んだ妃を、まるで卑しい存在の様に例え、王城から追い出した母を誉めそやしたのだ。そんな権力と身分に溺れた貴族と母が、アルドは大嫌いだった。そして、その母に正妃だからと何の処罰も与えない父にも、不満を抱いていた。

けれども皮肉なことに、そんな彼の心情を理解出来る者は、王城には一人もいなかった。そう、王城には。

「ふうん、じゃあアルド兄様は、貴族に嫌われたって別に構わないと思ってるっしょるんだ？ 自分自身が嫌いだからって」

鈴を転がす様な高く軽やかな声で、一人の少女が問うた。

今アルドがいるのは、王城からは少し離れた場所にある、森羅離宮と呼ばれる場所である。白雪岩と呼ばれる真っ白な石で作られた離宮は、王城の様に豪華さは無いが、王城よりもずっと優雅で、儂げな美しさを持っていた。

そして相対するのは、陽光と月光の間の色合いをした金糸の髪を持つ少女。肌は冬に積もる新雪の如く白い。他人が見たら絶対に信じないだろうが、それでも少女はアルドの異母妹だった。

彼女の身分を証明するものは一つ、その透き通る紫色の双眸だけである。金色の髪を持ち、そして紫色の瞳・・・つまり王族である証を持つ少女と言ったら、恐らく世界でもこの少女一人だけであろう。

名を、ファイアーテ・ヨルデ・アサン。

他ならぬこの国の王の血を引く娘であり、この国の第一王女。肩書きから言えば、この国で一、二を争う高貴なる姫君である。

けれども、彼女は母親の出自ゆえにこんな辺境の離宮へ追いやられているのだ。

彼女の母であるイレエネ・アルシュ・シャルデーネ妃は、他ならぬ 医神ノ一族^{リド・シャルデーネ}の娘だった。皇国の中で、唯一何の王国にも属

さない流浪の民。医術の知識に長け、自然の守護を得た神秘的で謎に包まれた民を、古い言葉である 樹海の守り手 シャルティネ に例え、 医神ノ一族 という名がついたのである。

けれども、彼等のことを快く思う国とそうでない国、皇国にはそのどちらも存在し、龍笛の王国は後者であった。

「でもねえ、アルド兄様はいずれこの国の王になるのだから、嫌でも貴族には愛想を売っておいた方が良いわ。兄様が嫌う、権力に溺れる様な貴族は、自分より身分の高い人に愛想よくされると良い気になって、忠誠を誓う、騙されやすいお馬鹿さんが多いから」

そう辛辣な言葉を吐く異母妹は、まだたったの十歳。それなのに、ここまで貴族の作りを分かっているのである。

それもまた、彼女の母妃の血と言えた。

彼女の母であるイレーネは、彼女と同じ金色・・・暁色の髪を持ち、そして薄い氷色の瞳を持つ、傾城の美女だった。そして、それと同時に英知に溢れた賢者の様な女性だった。

そんな才色兼備な美姫だったからこそ、王国が嫌う一族の生まれながらも王はイレーネを妃に迎えたのである。

医神ノ一族 は、元々とても優秀な頭脳と美しい容姿を持つこととで有名だった。特に、暁色の髪と青系統の瞳を持つのが特徴とされている。

目の前の少女は、青系統の瞳こそ受け継がなかったが、それで幸いだったかも知れない。そうでなければ、母妃を嫌う貴族達から、王の子である証拠が何処にも無いと非難されただろう。

実際、多くの貴族が、ファイアーテの髪が暁色だったことに喜び、紫色の瞳だったことに落胆したものだ。

「ねえ兄様、私の話を聞いているの？」

自分の意見に何の相槌も反応もしてくれない兄に、ファイアーテは怒った様に尋ねた。

「ちゃんと聞いているよ、ファイアーテ」

優しく答えると、異母妹は嬉しそうに笑ってから、話題を変えて

くる。

「そうだ、兄様は 古き神の言葉 トライヴェール というものを知っている？」

「トライヴェール？」

「そう。私達の二つ名に使われているのは、全てトライヴェールなんだって」

「へえ」

またしても新しい知識を手に入れたらしい賢い妹姫に、アルドは感心と苦笑のこもった顔を向けた。彼女はとにかく何かを知ることが好きな少女だった。暇さえあれば蔵書室にこもって、そして必ず何か新しい知識なり疑問なりを携えて戻ってくる。

トライヴェールなどは、本来十歳の子供が知るものではない。実際、十五であり国の世継であるアルドでさえ、そんな難しいことは知らない。

そういう事を学ぶ必要は、王族には無いからだ。二つ名をつける時も大抵は、子が生まれた時に占術師を呼んで、その者につけてもらうのが常だ。

「例えばね、アルド兄様のイスカシヤというのは、 龍の瞳 というものなの。龍笛の王子だから、そうつけられたのね。良い名前だわ」

今まで全く知らなかった意味を教えられ、更には褒められて、アルドは少し嬉しくなった。そこで、彼女の名前の意味も訊いてみた。「ファイアーテのヨルデはどういう意味なんだい？」

「私？」

きよとん、としてからファイアーテは考え込む様な顔をした。

こういう所がファイアーテらしい最たる所だ。自分の事よりも他人の事が気になる。普通は、真っ先に自分の名前の意味を知ろうと思うと思うが。

すると、そこに一人に女性が現れた。

ファイアーテと同じ暁色の長い髪を綺麗に結いあげ、淡い色の宝石で派手すぎない位に着飾った、薄氷色の瞳と雪の肌を持った妙齡の

女性。

「母様」「イレーネ様」

異母兄妹の声が重なる。

「お久しぶりですね、アルド殿下。後挨拶もせず失礼しました」
そう言つて微笑むイレーネは、まさしく絶世の美女と呼ぶにふさわしい美姫である。

「ファイアーテ、あなたの名前はね、ファイアーテもヨルデも、どちらもトライヴェールなのですよ」

王族貴族では、おそらくたった一人であろう、自分で子にトライヴェールの名をつけた王の妃は、一人娘に優しく告げた。

「ファイアーテは 龍の翼、そしてヨルデは 天空 という意味を持つのです」

「そしてイレーネは 美しき冬の雪！」

やはり自分のものより他人のトライヴェールが気になるらしい妹のはしやぎ様に、アルドは口元を緩めた。こういう無邪気さをもつた兄弟は、何人もいる家族の中ファイアーテしかいない。

純粋なまま生きられる程、王族の生活は易しいものではないのだが、けれども、その上悪意に晒されているとは思えない程、この二人の暁色の髪を持つ女性は、純粋で綺麗なままの心を持っていた。

彼女達一族を、この国が忌み嫌う理由が、全く分からないという訳では無い。

医神ノ一族 は、純粋過ぎるのだ。

穢れていない、透明で美しいままの心を持つ。人の持つ邪心や罪と言つた、黒い部分を持っていない。それ故に王はイレーネに惹かれ、母は彼女達親子を毛嫌いするのだろう。

一緒にいるだけで心を洗われる、そんな清廉な一族。彼女達には何か、特別な物がある気がしてならないのはアルドだけでは無いのだろう。

楽しげにトライヴェールの話をしている異母妹を、アルドは愛しげに見詰めた。

そしてそれが、アルドとファイアーテの、平和に過ごせる最後の時間だった。

国王の危急

聖獣暦1309年。龍笛の国の王が、毒に倒れたのだ。

その報せを受けた王族達は、一斉に城の王の寝室に集まった。

「国王陛下は、おそらくミスリヤの葉にお倒れになったのかと」

王付きの侍医に言われ、アルドは驚愕と衝撃で気が遠くなった。

ミスリヤの葉は、猛毒だ。けれど、ただの猛毒では無い。致死毒なのだ。しかも厄介なのは、ミスリヤは遅延性の毒で、体内に入ってから数時間、または一日以上経たないと症状が出ない。

犯人も分からず、必ず標的を殺す事が出来る猛毒。それがミスリヤで、その名の由来は 知られざる死神^{ミスリヤン} からきているとされる。

だが、アルドが衝撃を受けたのは、それだけが理由では無かった。ミスリヤの葉が生えるのは、たった一ヶ所とされている。それが、黒海の森。しかもそこは、彼の 医神ノ一族 が拠点の一つとしてしている場所なのだ。

(このままじゃ、ファイアーテとイレーネ様が、疑われる・・・！)

あの二人が王の暗殺を企む事は、天地がひっくり返っても有り得ない。という事は、これは誰かの陰謀なのだ。王と、あの第四妃の母娘の両方の存在を邪魔に思っている誰かの。

「ミスリヤの葉を使ったという事は、誰の仕業かは見え透いているじゃありませんか」

寝室の中にいる一人、アルドの母、后サリアが、神経質な声で言った。

「母上・・・！」

諫めようとする息子を無視して、サリアはここぞとばかりに声を張り上げる。

「ミスリヤは死神の毒。そんな毒が生えるのは、ただ一つ、かの魔女ノ一族 が棲む黒き森だけでしょう」

魔女ノ一族。 医神ノ一族 の忌み名で、龍笛の国等、彼等に好意的で無い国のみで使われるそれに、アルドは顔を顰めた。そして、母に気付かれない様にフィアーテやイレーネの方を気遣わしげに見詰める。

その視線に気付いたイレーネが、静かに首を振った。気にするなという意味なのだろう。

確かに、ここでアルドがイレーネを庇ったところで何にもならない。むしろ、母に自分がイレーネやフィアーテと親しくしている事を勘付かれてしまうかも知れない。

危険な橋を渡るより、母の気が済むまで好きだけ言わせておいた方がマシかも知れ無い。第一、この場にいるほとんどの王族が、犯人はイレーネだと決め付けているだろう。

「確かに・・・あの方は、先日離宮に移されてばかりだったし・・・

」
後の言葉に、他の妃達も賛同の言葉を口にし始める。

(これだから・・・これだから嫌いなんだ、貴族なんて！)

歯を食いしばって、何とか怒鳴りたいのを我慢する。すると、侍医の一人が、王が目覚めた事を知らせた。

皆が一斉に寝台の傍に近寄る。天蓋の下にいる王は、随分と顔色が悪くなっていた。

侍医の中で最も老いた男性、つまり筆頭侍医が、重苦しい声で言った。

「王の容態は、一刻を争う状況です。今日の夜、狼の刻までに薬草が手に入らなければ、おそらく・・・」

その場の人間が、アルドを含め一様に蒼褪めた。

「や、薬草とは・・・！ 薬草とは、一体何なのです！」
第五妃が問うた。

「それは、セインの花ですが・・・。この花は、ミスリヤと同じく黒海の森 にしか生えない貴重な草花でして、あるとすれば彼の森に入ってから薬草を入手する事を厭わない、隣国、 大剣の国

かと・・・」

「た、大剣の国ですって！ 冗談ではないわ、彼の国に恩を売られるなんて」

龍笛の国と大剣の国は、お互いに文と武の超大国として、犬猿の仲なのだ。

「ですが、王の御命を救うにはそれしか手段が・・・」

「あるじゃないの。ここに、黒海の森 を知り尽くしている者が、いるじゃない！」

「な、何を仰っているのです！」

イレエネを指差した第五妃に、アルドは非難の目と声を向けた。相手が王太子である為に、第五妃は少し怯んだ様に口をつぐんだ。

「イレエネ様は他ならぬ王族の一員！ それに、貴女よりも身分の高い王族であられる！ その御方に、あるうことか 黒海の森 に入れと？ この王城より 黒海の森 まで、どれだけの距離があると思われる？ 女性の身でそれは無茶だ！」

その場にいるアルドとファイアテ、それにイレエネを除く全ての王族が、アルドの発言に目を見開いた。皆、第一王子であり正妃の息子、正統なる王国の後継者が、異端の妃を庇うとは思っていないか ったのだ。

「アルド殿下。私如きの為に、そこまで仰って頂く必要はありません。それに、私もまた、陛下の妃の一人です。陛下の為に、何としても薬草を取って参りましょう」

「イレエネ様っ？」

自ら申し出たイレエネに、アルドも彼女の娘も驚いた。ファイアテは、不安そうな顔で母を見詰める。

「そ、そうよ。ほら、アルド殿下？ 本人がそう仰ってるのですから、行かせれば良いではありませんか」

ここぞとばかりに第五妃が口を開く。

それに、反対する者などここにはいない。アルドも、イレエネ本人がそう言ってしまった以上、庇い様が無かった。」

それから、イレーネは、たった一人で黒海の森に入ろうとした。だが、それを焦って止めたファイアーテも付いて行く事になり、二人だけの旅となってしまったのだった。

王太子という身分から、ファイアーテの様に付いて行く事が出来ないアルドは、出来る限りの直属親衛隊を彼女等に付けたのだった。

「母様、セインの花とは、一体どういった薬草なの？」

「セインの花は、とても小さな青色の花よ。そうね、ファイアーテの親指位の大きさかしら。だから、群生しているものを見付けなければ、とてもじゃないけれど薬は作れないの。でも、群生しているものは、今はとても少ない。だから、はい」

優しく笑うと、母はファイアーテの掌に、冷たい物を置いた。

見ると、白磁の陶器だった。小ぶりで、幼いファイアーテの掌より少し大きい程度。つやつやとした表面を、何度も撫でながら、ファイアーテは目で母に問うた。

「これはね、セインの花を見付けたら、この中に入れて、一杯になったら鷹に託す為のものよ。中もちゃんと消毒されているから、セインの花をここに入れなさい」

にこりと笑って言うイレーネは、ファイアーテの持つ陶器から、木で出来た栓を抜きながらそう説明してくる。

「・・・解った」

こくりと頷くファイアーテは、まだ黒海の森の薄暗さに恐怖は感じていなかった。それに気付いたイレーネは、ファイアーテに松明の一つを渡すと、分かれ道の右側を指差した。

「良い？ 私は左へ、あなたは右へ、それぞれ花を探しに行きましょう。半刻が過ぎるまでには、ここに帰っていらっしやい」

まだ日は完全に沈みきっていないから、それ位の時間は容易に測れる。

「うん。きつとたくさん、花を見付けてみせるね、母様」

力強く宣言すると、イレエネはとろけそうな笑みを浮かべ、そして足早に奥へと進んで行ってしまった。

「やってみせる！ 母様の為に」

父親の容態よりも、ファイアーテにとって優先するべきは母の立場だった。ここでセインの花を必要なだけ容易して、父に解毒薬を持っていければ、少なくとも一時的には母の立場は安定する筈。

たった十歳と雖も、それ位は理解しているファイアーテだった。

松明の橙色の優しい光に照らされて、中から見る黒海の森は、そう不気味な物でもなかった。森の中にいると噂される、恐ろしい黒羽に赤い目を持つという鳥もいなかったし、特に猛獣が出る気配もなかった。

更に、事態はファイアーテにとって喜ばしい事続きとなった。

「わぁ・・・」

ある程度道を行つた頃、青い光を放つ神秘的な小さな花が、群生している場所があつたのだ。思わずその神々しさに見惚れてしまったファイアーテは、暫くしてから目的を思い出し、陶器の栓を抜いた。小さな滑らかな穴に、小さな花を摘んでは入れていく。小瓶程の陶器の入れ物が一杯になる程入れても、花は一向に減らなかつた。

そんな、理想通りの環境があつた事に感謝しながら、ファイアーテは来た道に戻つて行く。けれど、そんな彼女の道を、塞ぐものがあった。

「やっぱり、人生って幸運続きにはならないか」

そんな風に、落ち着いて冷めた文句を言えた自分に、彼女は後から感心した。

「こりやまた、随分と外見と口が合わないお姫様がいたもんだな」
彼女の小さな小さな呟きを聞き取った、恐るべき聴力を持つ「道を塞ぐもの」の一人が言った。

「成程。だから依頼主はあんなにこの娘の暗殺に執着していたのか」
暗殺。

初めて聞く単語では無いけれど、権力とは縁の無い生活を送って

いる自分には、とてもじゃないが似合わない単語だ。

そう思いながらも、彼等が冗談で言っているのでは無いと分かる。あからさまに刺客です、と宣言している様な全身黒尽くめの格好に覆面。むしろ、この姿で仮装大会を連想する方が、頭がおかしい。

「もしかして、サリア様の子飼い・・・とか」

「ワオ。こりゃ本当に、頭がイイみたいだな。本当に十歳か？」

「だからこそ、王太子の邪魔になるかも知れないのだろう。まあ、あの王太子も優秀らしいから、だとするとやっぱり、自分の娘より目立つのが恨めしいってところか？」

刺客達が好き勝手に言う。ファイアーテは、その間、どこかに隙は無いかと探ったりは出来なかった。いくら頭が良くても、そこまでの度胸は持ち合わせていないのだ。

それでも、何とか身体が震えない様にと、掌を爪が食い込む程強く握り締めた。

「でもま、ぐだぐだ話している暇は無いんだ。悪いが、ここで死んでもらうぜ、お姫様」

刺客が、すつと腰に佩いた剣の柄に、手をかけた。音も立てずに抜かれた片刃の剣に、ファイアーテの身体が痙攣した。

その時だった。

「ファイアーテっ！」

母が、今まで聞いた事も無い、大声で自分の名前を呼んだ。その顔には、鬼気迫った険悪な表情が浮かんでいる。

「私の娘に手を出すのなら、まず私を殺してからになさい！」

怒鳴った母は、衣の裾を華麗に捌きながら、恐れもせず刺客達に寄って行く。

「素晴らしい親子愛だな。いいだろう、まずはお前から殺してやるよ、心優しきお姫様」

刺客の持つ刃が、母に向けられる。彼等の注意が娘から逸れた瞬間、イレーネは娘に叫んだ。

「ファイアーテ！ このまま、とにかく森の奥へ走りなさい！ そう

すれば、きっと我が一族が助けしてくれる。道は、森が自然と導いてくれるわ！」

刺客さえも気迫で圧倒される程の、母の言葉。それに、ファイアーはただ頷いた。

「行きなさい」

柔らかに微笑む母の瞳に、ファイアーはこの事態の結末を見そうな気がして、慌てて目を逸らした。そのまま、母の言い付け通り、森の奥へと走って行く。セインの花を踏み付けてしまったが、そんな事は気にならなかった。

随分と長く走ってから、自分のずっと後ろの方で、誰かの叫び声が聞こえた気がして、ファイアーはその場で蹲り、ぎゅっと両耳を塞いだ。

それから、そっと手を耳からのけると、もう何の音もしなかった。松明も先程のセインの群生地置いて来てしまったから、何の灯りも無い。ほとんど沈みかかった夕陽だけが、太陽の断末魔の様に真紅の光で空を染め上げていた。

「母様……」

母がどうなったかなんて、考えたくも無い。けれどもファイアーは、あの場から逃げてしまった自分が、何よりも恥ずかしかった。いくら命が危ないからと言っても、母を楯に逃げるなんて。

自然と、紫の瞳から涙が零れた。

(どうして……？ どうして、后はこんな事を、私達にするの？) 自分は、ただの第四妃の娘だ。彼女の息子であるアルドの障害になる事は、絶対に無い。后が何度もしつこく言うから、母は大人しく王宮から出て行ったのだ。なのに、どうしてここまでされなければならぬのか。

「ひどいよ……私が、母様が、何をしたというの……？」

滂沱と涙を流すファイアーの上で、何かの羽音がした。先程の刺客を思い出し、身を竦めるも、恐ろしい気配は何もせず、そっと瞼を上げる。すると、目の前に大きな鷹がいた。

「もしかして……これを取りに来たの？」

陶器を見せると、鷹は自分の足を差し出した。毛織物の袋が結び付けられている。

「自分が殺そうとする相手から、薬だけは取り上げようって言うの？ 本当に身勝手ね」

どうしようもない憎悪が、ファイアーテの胸の奥底から湧き上がる。胸の中に、陶器を投げ捨ててしまおうかという考えが浮かんだ。だが、その考えは、アルドの顔を思い出し打ち消される。

誰よりも自分を思ってくれていた義兄を、悲しませる事はしたくなかった。

ファイアーテは、鷹にセインの花を託した。

「さよなら、龍笛の王国。もう二度と、戻る事は無いわ」
忌まわしい記憶が残る、母国になど。

天空の龍の娘【上】

第一章 天空の龍の娘

皇国では珍しい女商人であるカーエンは、今回新しい事業に手をつけた。

それが、黒海の森を放浪して暮らしているとされる、医神ノ民との交易だった。彼女の出身地である水鼓すいこの国くには、文を極める派の国で、主に発達しているのは絹織物や綿織物、毛織物といった織物である。

だが、商人であるからには、そんな物にはかり現を抜かしてられない。特に、彼の医神ノ民との交易に成功すれば、今まで世に出回っていない薬が手に入るのだ。

薬は、生きて行く為には絶対不可欠な物。商人として、手を出して損は無い。

「我が一族と、交易を結びたい、とな」

「はい、そうです」

やっと会えた 医神ノ民の者に連れられてやって来たのは、族長の息子だという人物の目の前。

初めて見る金糸の様な輝く髪と、氷を詰め込んだ様な、冷たく鋭い双眸に内心身を震わせながらも、カーエンは頷いた。

目の前にいるのは、二十代半ばの彫りの深い、きつい顔立ちの青年。彼は値踏みする様にカーエンを見ると、一人の女性にこう言った。

「フィアを、ここへ」

「？」

意味が解らず怪訝な顔を見ると、族長の息子は、先程よりは少し表情を和ませた。

「フィアは、私の従妹にあたる。私の父の妹である、イレーネという者の娘でな。訳あって、今は母元を離れ私の許にいる」

何故そんな事を言うのか、解らない程、カーエンは素人では無い。
(やはり、駄目か・・・)

元々、一族は人と関わるのを嫌う。上手くいったら儲けモノ程度に思ってたが、やはり失敗は悔しい。その時、族長の息子の後ろにあつた天幕から、一人の少女が出てきた。

この一族特有の、女も男も動きやすさを重視した、軍服の様な服を着ている事に変わりは無かったが、その少女は異質だった。

(な、何なの、この子・・・この子の、この目は！)

白地に太い赤紫色の線が入った服に、首から提げるのは、薄氷色の神秘的な石をくり貫いた鍵に、金色の鉱石が埋め込まれたもの。

髪の色は、一族と同じ黄金色。けれど、瞳は青系統の瞳では無く、透き通る紫色だった。紫水晶を思わせるその瞳は、しかし子供らしい無邪気さの欠片も宿していない。

少女の顔立ちには、花の様なと形容するのに相応しい、美しく可愛らしいものだったが、その表情はどう見ても、この年齢の少女がするものではない。

少女は、その身体に影を背負っていた。

「フィア、挨拶を」

「・・・フィア・ヨルデ・シャルーディネ、十二歳です。以後、お見知りおきを」

すつと右手を胸の前に当て、左手は背に回し、綺麗に腰を屈める。完璧な礼をした少女に、カーエンは驚きを隠せなかった。

しかも、少女・・・フィアが行った礼は、この一族で使われているものでは無く、皇国の礼儀作法、それも貴族等の身分ある者達が行うものだ。

そんな事をこの少女が知っているのが、カーエンには不思議でならなかった。

「カーエン・ロディ・メーデルです。出身地は水鼓の国、職業は行商人を」

名乗ると、フィアは頷いた。

(これが、十二歳・・・?)

確かに、顔立ちにはまだ幼さが残り、身体付きも華奢。けれど、あまりに瞳が不一致だ。

「我らは、貴方と交易をする訳にはいかない。我ら一族は、人と関わる訳にはいかないのだ。その代わり、この娘を連れて行くが良い。この娘は、たった二年間だが我らと生活を共にし、我らが持つ知識の全てを持っている。それだけで、十分な益になる筈だ」

族長の息子が、厳かに言った。

「え・・・?」

驚愕して、カーエンは族長の息子を見た。だが、彼の瞳に冗談の色は見えない。

「ですが、この子の母親は・・・?」

そう言った瞬間、ファイアの身体大きく跳ねた。

「問題無い。その母親は、今や消息不明なのだ」

「そんな・・・」

「貴女は、利益を求め、ここまで来たのだろう。ならば、何を躊躇する必要がある? すぐにでもファイアを連れ、この森を出るが良い。もうじき日も暮れる」

唐突に、付き放す言い方に変わると、そのまま彼は天幕をくぐって行ってしまった。

「あまりにも、身勝手じゃないんですか? 自分の従妹なんですよ、この子は」

周りにいた 医神ノ民 の一人に同意を得ようと問いかけるも、彼は何も言わずに族長の息子の後に続いてしまった。そのまま、次々とその場にいた者は天幕をくぐって行ってしまふ。

茫然とそれを見ていたカーエンに、声をかけたのはファイアだった。「そんな事を、一々気にしている暇があったら、早くこの森を出る方がよっぽどマシだと思います」

「え?」

「貴女が私達との交易を望んだから、彼等は私を貴女に差し出した。

交易が出来なくても、貴女が欲する利益は、私の知識だけでも充分得られる筈です」

淡々と話すフィアに、女商人は思わず彼女の肩を掴んだ。

「何を言っているの、君は。君は、医神ノ民の一人なんですよ？ 同族から別れるのが、辛くはないの？」

すると少女は、抑揚のない声で、表情一つ変えずに答えてみせた。
「私は同族であって、同族では無いから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1484q/>

神獣の皇国 ~ 龍笛の空姫と大剣の騎手 ~

2011年5月22日04時40分発行